

---

**僕はすべてを悟った気がした。**

あまね人

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕はすべてを悟った気がした。

### 【NNコード】

N7027S

### 【作者名】

あまね人

### 【あらすじ】

2022年、社会人の僕は実家へ戻る。

実家には倉庫があり、電子化された時代にもかかわらず大量の本がある。

その本の中で古い書物をみつけた。

それには・・・・・。

(前書き)

初めての小説をかかせていただきました。  
最後まで読んでいただけたら感謝いがいの言葉がでません。

それは7月のジリジリとした暑い夏。  
2012年12月人類滅亡」とうたわれてからはや10年の日々が流れていった。

その頃、小学生だった僕は死ぬ前に楽しもうと今までにしたことのない事をして母親にたっぷりと甘えた。  
だが2013年になり何も起こらなかつた時の自分の恥ずかしい感情は今も鮮明に残つている。

「今日そつちに帰りたいんだけど大丈夫？」

慣れた手つきでメールを打つ。その時時計にはAM8:00と表示されていた。

ソファに座るとオートでテレビがつき「コーヒーが運ばれてくる。  
角砂糖をひとつ入れ、軽くかきませ音をたてて飲んでいたところで  
別の音がテレビの音と混ざつた。

視線をテレビからソファにずらし着信を確認する。

「久しぶりだね。 かえつておいで」

と優しい顔文字のついたメールがかえつてくる。

僕はすでに準備はできていたのすぐには家をでた。

飛行車に乗りナビに目的地を教える。到着時間はPM7:45と表示された。

時間があるな、そう思い飛行車では音楽を爆音で流し田を閉じた。

「到着しました。お疲れ様でした藤原様。」

僕はナビの声で目をひらく。飛行車を降りると田の前には懐かしい風景と古びた家がある。

この古びた家が僕の家だ。両親は比較的お金を持っているにもかかわらず引っ越さないので。

父いわく

「この古い感じがなんともいえない味をだしているだろ?」

誇らしげな父の顔を思い出し僕は少し笑ってしまった。

古い家なのでガードが居ないためセミの心地よい声をBGMにインター ホンに声をかける。

「母さん、ただいま」

僕は開いたドアの向こうの母を見て落ち着いた。

「久しぶり。浩二つたら全然連絡くれないんだもの。会社はどう?」

「いい軌道にのってるよ。これからはやっぱり電子の時代だ。埋め込み形メモリーカードが飛ぶような勢いで売れてるんだ」会社の話をしていると父が一階から降りてきた。

「帰ってきていたのか」

父はいつもこうだ。少し遅れてくる。大勢でつるむのは苦手なタ イプの人だ。

「ああ、ただいま」

父は僕から目をそらす。

「倉庫のほう少しのぞいてきていいかな? 会社で新しい企画を作 るのに役立てたいんだ」

「ああ、好きに使えばいい」

父がそういうと母がつづけて

「すぐにご飯できるからね」

母の手作り料理だ。僕は「ああ」と返事をし、倉庫に向かう。

今はデータ化されていて”本”という言葉の存在自体危ういが、うちの家の倉庫には本がたくさんある。

僕は今はなき本を倉庫で探すために家に戻ってきた。と、いつても過言ではないかも知れない。

倉庫のスイッチ式のボタンを押し電気をつける。

「また量が増えたか・・・・・?」

前にも増して古臭い雰囲気をおびた倉庫で本をあさる。

ガタツ

本に足をぶつけ山積みにされていた本たちが電子推進派の僕にこれでもかと言わんばかりに襲い掛かってきて、ずつしりとした重みを感じる。

「うつ・・・・・」

のしかかつてきた本をよけて立ち上がる。

「・・・・・これは？」

ひとりわキレイな赤い箱を見つけた僕はそれを手にとった。その赤い箱を開けると古そうな書物がしてきた。

古そうな書物を開くと、それはマルシャル語だつた。マルシャル語は数年前に確認された猿が人類に進化を遂げる前に生存していたモルゲルという人種の扱う言葉だつた。

ついでに、モルゲルは感染病で滅んだと言われている。

モルゲルのマルシャル語はとても特徴的で、子音が何かのマークがくるつと丸まつていて、母音はトゲのような形だ。

僕はモルゲルのマルシャル語をよめた。なぜならば親友（研究者）が強くすすめてきたからだ。

「これはガチで合コンで使えばモテるから！…間違いねえから！…ほら、中学時代英語しゃべれる奴つてかつこよかつたろ？あれと同じ同じ。仕組みは日本語とていて簡単だから」

と無理くり押し付けられて会社で売られている埋め込み形メモリーカードで覚えた。

しかし合コンでは

「なにそれ～wうける～w」

まったくもつて理解してもらえなかつた。

ちなみにそれ以降もその親友はいろいろな知識をおしつけてくる。さながら営業マンのようなやつだ。

その赤い箱にはいつてあつた古そうな書物にはこう記されてあつた。

タイトルは、 私たちは生まれ変わる

「私たちは今どの歴史の、どの世界の生物よりもはるかに進んだ薬を開発した。

そう、それは何もせずに生きるとこいつとでも素晴らしい薬だ。まず、私たちがなぜ薬を開発せねばならなかつたというと、

私たちの文明は過去最大の難関な壁にぶつかつていた。

それは食料危機だ。

とても多きな地震や突然の気温低下で気温は常に -10 度を下回りとても住める環境ではなかつた。

それで私たちはラボに隠れて非常食で命を繋いでいた。

それから半年、非常食も尽きたが誰一人生きのをあきらめなかつた。

一か八か何もしないでここに死ぬよつはと、どうなつてゐるかわからぬ地上へでると

そこには暖かい空気とともに氣持ちよく晴れ渡つた空がひろがつていた。

私たちは歓喜した。

しかし、私たちは気づいたのだ。そこには晴れ渡つた空、あつたまつた石と地面しかなく

私たち以外の生物が存在していないと。

そして私たちは今まで作つてきた薬すべてを捨て、使えるものは混ぜ合わせ

薬を開発した。

その薬は太陽の光と空気だけで生きのことができるところのものだつた。

信じるひとはさう簡単はないが、ラボの責任者のアヴェードが言つた。

のだから

間違いはないであろう。私はこれをとてもうれしく思つ。

しかし、姿が少し変化してしまつらしく、不安は隠しきれない。

だけど私たち生きるためにこれしかないのだ。

「私たちは全員薬を飲んだ。」

と、ここまで記されていてあとは空白のページだった。

僕はそれを読み、世の中の事、すべてを悟った気がした。

その後、僕は会社を退職した。

(後書き)

製作時間は3時間ほどです。最後までお付き合いでしていただきありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7027s/>

---

僕はすべてを悟った気がした。

2011年10月9日01時03分発行